

## 氷河期の野生生物

### 時に忘れられた生命体

南アルプスの地形の多くは、2 万年前の最終氷河期の氷河の作用によって形成されました。そのため、南アルプスの山々は多くの北極種（氷河期に生息域を南に拡大し、気候が穏やかになった後も山の高山帯に留まった動植物）の生息地となっています。

これらの遺存種の中で最も有名なのはライチョウ（日本語で「雷の鳥」という意味、嵐のときに現れることからそう呼ばれる）です。ハトより大きくニワトリより小さいライチョウは、日本で保護対象に指定されています。ライチョウの生息域における北半球の最南端は、南アルプス国立公園の南端にある光岳です。ライチョウは、できるかぎりの保護を必要とするあまり活動的ではない鳥で、迷彩、つまり保護色の達人です。春から秋まではまだら模様の羽で岩場の環境に溶け込みますが、冬になると白くなって雪の中で見えなくなります。

南アルプスの高山植物には、北極種が多く見られます。3 種の白い花びらを持つ花は、キタダケソウ（文字通り「北岳の植物」という意味、*Callianthemum hondoense*）；高北極全域で見られるムカゴユキノシタ（*Saxifraga cernua*）；そして 8 枚の花びらを持つチョウノスケソウ（*Dryas octopetala*）などが見られます。タカネマンテマ（*Silene uralensis*）は、特徴的な白と緑の縞模様の萼を持っており、その萼が暖かさで保護を提供するため、ハエはこれを孵化器として使用します。